

障害児者の施設実習における保育学生の学び

一保育実習IA報告書より

R5年度子ども学科2年生 石井佐奈 小原彩音 山本雪葉

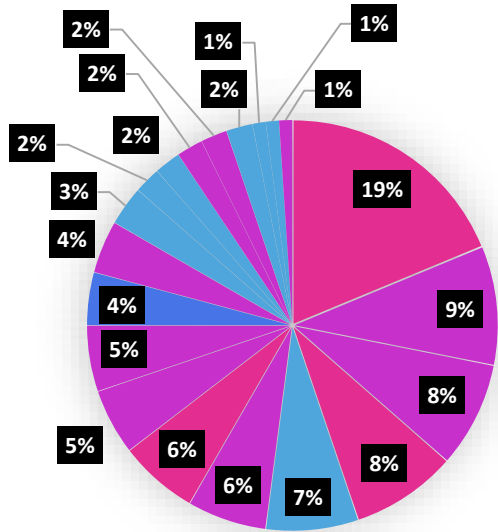
研究の背景と目的

現在の保育学生の多くは、保育所保育士を目指して、資格取得を希望する意識が強い傾向がある。そのため、施設実習に対して、否定的な感情を含む意見が多く聞かれる現状がある。このことから我々は、なぜ、施設実習をしなければならないのか理由を見だし、実習の有効性を周知することを目的として、研究を行った。

方法

対象：保育実習IA報告書（令和二～四年度）の中から障害児・者の施設に実習へ行った保育学生の報告書の内容

手法：その人物が新たに学びを得た、または改めて認識した事柄をカテゴリ分析し、その数や内容の偏りを考察する。



- コミュニケーション (18件)
- 自立を促す関わり (8件)
- 障害者の特性(7件)
- 活動(6件)
- 読み取りの大切さ・重要性 (5件)
- 情報収集の大切さ (4件)
- 職員の仕事 (2件)
- 観測の大切さ・必要性 (2件)
- 現代社会における障害者像 (2件)
- 障害者観(1件)
- 障害者の思いを考慮した関わり (9件)
- 生活環境(8件)
- 予測的関わりの必要性 (6件)
- 障害者への基本的対応 (5件)
- 技術の未熟さから自分を振り返る (4件)
- 生活の場である環境 (3件)
- 現代社会における障害者像 (2件)
- 生活を考慮したかかわり (2件)
- 入所者の人間関係(1件)
- 障害者の興味を生かしたかかわり (1件)

結果

○カテゴリーごとの偏りはあまり見られなかったが、サブカテゴリーごとの偏りには特徴がみられた。
○上位一件を除いても5件以上のあったサブカテゴリーが半数を占めた。

このことから多くの障害児・者施設に実習へ行った保育学生が学んだことはその分類法や数の差はあるものの「学習した」と感じる傾向があるサブカテゴリーが数件存在することが分かった。

カテゴリー (計4)	サブカテゴリー (計17)
障害児・者に適した支援方法 (3サブカテゴリー32件)	コミュニケーション (18件) 活動 (6件) 生活環境 (8件) 障害者への基本的対応 (5件) 観測の大切さ・必要性 (2件) 読み取りの大切さ・重要性 (5件) 障害者の思いを考慮した関わり (9件)
障害者の特性を生かした援助の必要性・重要性 (9サブカテゴリー42件)	生活を考慮したかかわり (2件) 情報収集の大切さ (4件) 障害者の興味を生かしたかかわり (1件) 自立を促す関わり (8件) 予測的関わりの必要性 (6件)
障害児・者、環境特性の理解 (7サブカテゴリー18件)	障害者の特性(7件) 生活の場である環境 (3件) 入所者の人間関係 (1件) 障害者観 (1件) 職員の仕事 (2件) 現代社会における障害者像 (2件) 現代社会における障害者像 (2件)
自己の振り返り (1サブカテゴリー4件)	技術の未熟さから自分を振り返る (4件)

考察

考察ではサブカテゴリー上位3つからさらに、どのような内容でそのカテゴリーについて学んだことが書かれているかを分析した。

コミュニケーション	障害児・者施設で実習を行ったほぼすべての保育学生が「コミュニケーションの重要性」を「できた」「大切」という言葉で語っており、その方針として「信頼関係」「特性理解」「情報伝達」の三つが挙げられていた
障害者の思いを考慮したかかわり	一人一人に寄り添いながら、利用者が落ち着いた生活を送るための適切な距離感で関わることで、利用者の行動を否定的に捉えず肯定的にとらえることが大切であると示されていた。
自立を促すかかわりについて	「1度待つ姿勢が大切」「施設内でのモラルの重要性」「目的をつくり、達成感を味わえる経験をさせる」ことが主に必要であるということが示されていた。

まとめ

・職員は障害児、者の発達段階、障害の重さに応じて、主体的に自己の力を可能な限り発揮させるような支援を行っていることが読み取れた。
→これらの行動は保育現場においても必要
→施設実習において得られる経験からこれら能力を身につけて保育現場で大いに活かすことができる保育者になることは施設実習の意義であると考え
一方で研究の過程において実習前後で保育学生の心境の変化をより具体的に調査する必要性を感じた